

**第20回言語教授法・カリキュラム開発研究会 : 外
国語の授業における言語と文化の総合的学習 : 実
践報告と今後の課題**

著者	中村 典子
雑誌名	言語と文化
巻	10
ページ	271-272
発行年	2006-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000440

外国語の授業における言語と文化の総合的学習

実践報告と今後の課題

甲南大学国際言語文化センター
第20回言語教授法・カリキュラム開発全体研究会

日 時：2005年11月12日（土）13時30分～17時15分

会 場：甲南大学1号館141講義室

次 第

13:30～ 開会の挨拶 国際言語文化センター所長 教授 原田 登美

<第1部>

13:35～ 発表及び質疑応答：英 語 助教授 ポール・ロス

14:00～ 発表及び質疑応答：ドイ ツ 語 助教授 柳原 初樹

14:25～ 発表及び質疑応答：フランス語 教授 中村 典子

<第2部>

15:00～ 発表及び質疑応答：中 国 語 講師 石井 康一

15:25～ 発表及び質疑応答：韓 国 語 助教授 金 泰虎

15:50～ 総合的な質疑応答

16:00～ 閉会の挨拶 司会 国際言語文化センター 助教授 伊庭 緑

16:15～ 懇親会

研究会レポート

英 語 ポール・ロス：

「言語」と「文化」の関係はTESOL（英語教授法）という分野のなかでどのように論じられているのか紹介した上で、「国際共通語」としての英語を学ぶ上では、必ずしもアメリカ文化やイギリス文化といった英語圏の文化を学ぶ必要性はなく、むしろコミュニケーション・ツールとして英語を習得して運用能力を高めることが大事であり、「言語を特定の文化から切り離す必要がある」という英語教育特有の考え方が強調された。

ドイツ語 柳原 初樹：

ドイツ語における「教養」(Bildung)という概念やフランス語の「文化」(culture)について言及し、ヘーゲル、ガダマー、ベルグソン、アーレントを引用した上で「哲学的解釈

学」と「異文化理解」の明確な共通性を強調した。また、異文化圏の人々と目標言語でディスカッションを行うことの重要性、複数言語を習得する必要性に関して、インターネット上の自分のサイトを紹介しながら説明された。

フランス語 中村 典子：

「フランス語」の授業というより、むしろ「フランス文化」が中心に据えられた授業がある。「中級フランス語 フランス事情」は複数の講師による分担講義で、歴史、食文化、映画、文学、絵画などがテーマ。「言語と文化 フランス」では、フランス式小論文（dissertation）の書き方やフランスの諸制度を日本語で学び、学生に問題意識を持たせている。一例としてPower Pointを用いた学生制作のプレゼンテーション資料が紹介された。

中国語 石井 康一：

「基礎中国語」(文法)の授業の基本的内容を紹介した後、文法の授業の一部に映像(例「日本のロックグループGLAYの北京ライブにおける中国語でのメッセージと中国語での歌」「中韓合作ドラマ『101回目のプロポーズ』(原作は日本のドラマ)の一場面」など)を活用することで、学生に生の中国語や歌を聞かせ、芸術的文化的要素を取り込むことの学習効果について説明された。

韓国語 金 泰虎：

本学における韓国語の科目構成と授業内容について紹介した後、とくに文化と関係の深い2つの科目「中級韓国語 韓国事情」「言語と文化 韓国」の内容について詳しく説明し、隣国である韓国と日本における生活習慣や考え方の違いを具体的に示した。今後の課題として、「基礎韓国語」の受講者には上記の文化関連科目を必修してほしいという希望を述べられた。

総合的な質疑応答：

各言語の発表後の質疑応答の時間が少なかったため、全体での質疑応答の時間が有効に使われた。英語では言語運用能力の養成に力点が置かれるため、「言語と文化は別のもので」と考えられているが、他の言語(ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語)では「言語と文化は切り離しては学習できない」という考え方がほとんどであった。この点について活発な議論が行われた。

(文責：中村 典子)